

親子の会話の経年変化と、家庭背景による違い

親子間のコミュニケーションは子どもの成長や発達において重要であり、親子関係を見る指標の1つとなる。教育活動に生かすためにも、親子の会話の状況を知っておくことが大切だ。そこで、親子の会話のこの10年間の変化をデータから見ていく。

1

この10年間で、父親・母親ともに勉強や成績以外の会話が増加

図1 父親・母親との会話の経年変化（2015年・2024年別）



注1) 子どもによる回答(2015年、2024年)。注2)「よく話す+ときどき話す」の合計(%)。

父親との日常的な会話が増加

まず、親子の会話について、2015年から2024年の変化を見ていく(図1)。どの話題においても、母親との会話の頻度が父親より高い点は10年間で変わっていないが、注目したいのは、父親との日常的な会話が増加し、母親に比べて増加率が大きいものが多いことだ。例えば、中学生の「学校での出来事」は6.6ポイント増加、小学4～6年生の「友だちのこと」は9.1ポイント増加、中学生の「友だちのこと」は10.5ポイント増加していた。

その理由として、コロナ禍以降、父親の帰宅が早まり、子どもと過ごす時間が長くなつたことで、日常的に会話をする機会が増えたことが考えられる。そして、本調査によれば、10年前に比べて、放課後や休日に家で過ごす子どもが増え、友だちの家で遊ぶ子どもが減っている。その分、特に父親との会話が多くなり、学校や友だちなどの日常的な話題も増えているのではないだろうか。

次いで、2015年から2024年における親子の会話の変化を、話題別に見ていく。小学4～6年生・中学生とともに、「勉強や成績のこと」の会話の頻度は、父親は6割前後、母親は8割程度と、10年間で大きな変化はなかった。

母親との会話において、この10年間で大きく増加したのは、小学4～6年生の「将来や進路のこと」、小学4～6年生・中学生の「社会のニュース」だった。特に小学4～6年生の「社会のニュース」は13.2ポイントも増加した。父親との会話においても、この10年間で小学4～6年生の「将来や進路のこと」が増え、小学4～6年生・中学生の「社会のニュース」は大幅に増加した。

出典 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2024」

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で立ち上げた「子どもの生活と学び」研究プロジェクトによる調査。小学1年生～高校3年生までの親子約2万組を対象に2015年から毎年実施。子どもの成長のプロセスとそれに影響を与える要因を明らかにしている。本報告は2024年までの調査結果による。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

https://benesse.jp/berd/shotouchutou/research/pdf/oyako_tyosa_2024_0326.pdf



データ解説

ベネッセ教育総合研究所
主任研究員

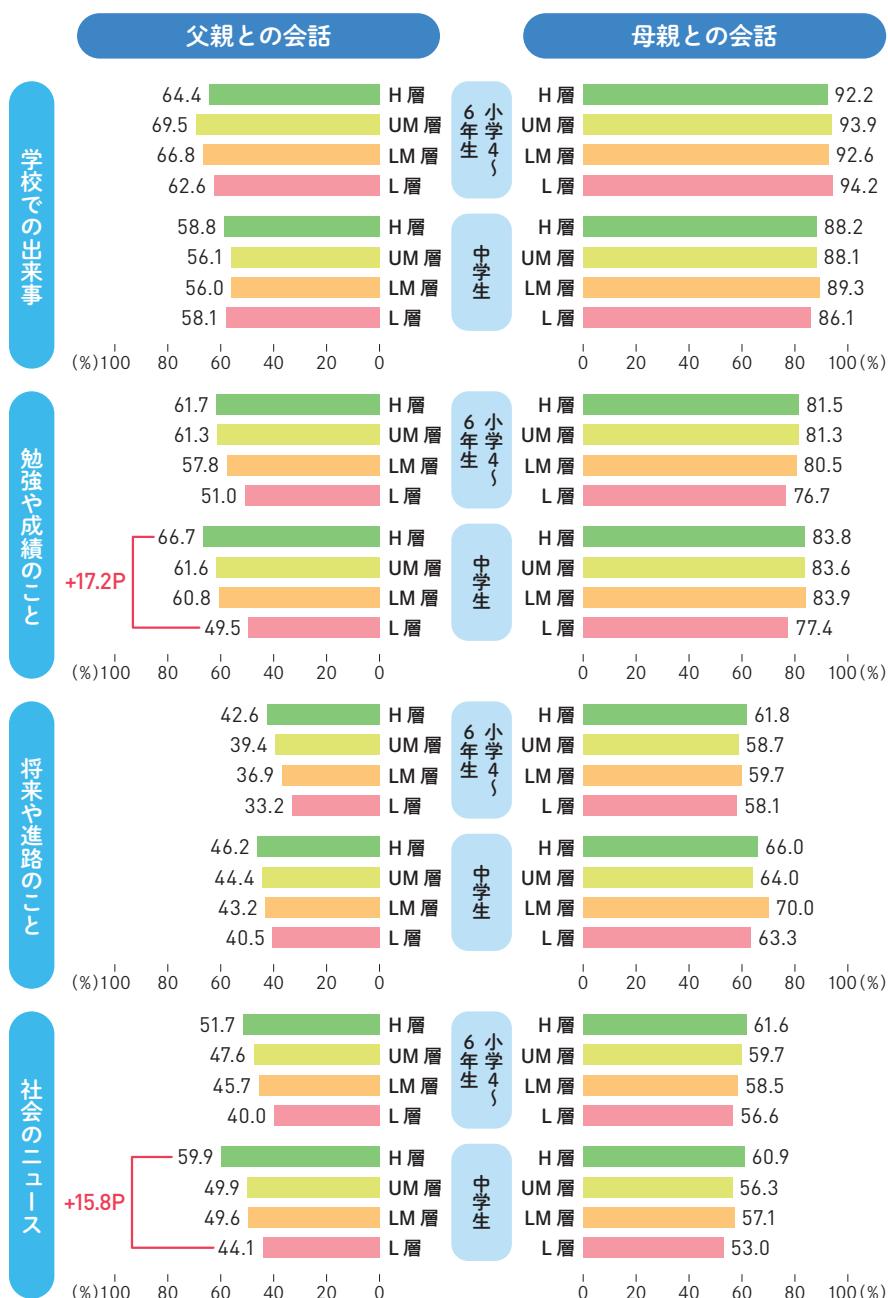
岡部悟志 おかべ・さとし



本調査のほか、乳幼児とその父母を対象としたパネル調査（縦断調査）にもかかわる。中でも、子どもから大人への移行段階にある青年期の発達・成長プロセスに関心を持ち、研究を進めている。

2 家庭の社会経済的地位が高いほど、勉強や社会のニュースの話題が多くなる

図2 父親・母親との会話の家庭背景による違い(家庭の社会経済的地位[SES]別(2024年))



家庭背景によって話題に違いがある

続いて、家庭背景が親子の会話にどのような影響を与えているかを分析した結果を見ていく。本調査では、家庭の社会経済的地位 (Socio-economic Status、以下、SES) 別に分析した(図2)。

その結果、SESによる差が小さかったのは、「学校での出来事」だった。SESによって一貫した傾向は見られなかったため、「学校での出来事」はどのような家庭でも比較的話されていると考えられる。一方、SESが高い層ほど会話の頻度が高い傾向にあったのは、「勉強や成績のこと」「将来や進路のこと」「社会のニュース」だった。とりわけ母親よりも父親の方がその傾向が顕著である。例えば、父親と「勉強や成績のこと」「社会のニュース」について話す頻度の高い中学生の割合は、H層とL層を比べると15ポイント以上の差があった。H層ほど、大卒かつ大企業で働く父親が多いため、子どもの勉強を重視し、社会の出来事にも関心を持っており、勉強やニュースの話が多くなると考えられる。

＊＊＊

本調査では、家庭背景によって「勉強や成績のこと」「将来や進路のこと」「社会のニュース」といった会話の頻度に差が生じていることが見えてきた。そうした状況に対して、学校が果たすべき役割は大きい。例えば、将来や進路について考える授業を行ったり、社会人の講演会を実施したりするといったことだ。本調査は会話の話題とその頻度のみの調査であり、その質や内容については分からないが、学校教育においては、どの家庭の子どもも将来への視野を広げられる機会の充実が求められるだろう。

注1) 子どもによる回答(2024年)。注2) 「よく話す+ときどき話す」の合計(%)。

注3) 家庭の社会経済的地位(SES)：世帯収入や保護者の学歴・職業などから作成された家庭の経済的・文化的豊かさを表す指標。本調査では、SESを低い方から順に約25%ずつ、L層(Lowest SES)、LM層(Lower middle SES)、UM層(Upper middle SES)、H層(Highest SES)の4つのグループに分けて集計した。